



Pygmalion

1958. 4 ~ 5

上映映画解説

No. 51

ピグマリオン

“PYGMALION”

ガブリエル・パスカル・プロ1938年作

製作……………ガブリエル・パスカル
 原作 } ……………バーナード・ショー
 脚色 }
 台詞 }
 潤色…………… { W・P・リップスカム
 セシル・ルイス
 アイアン・ダルリンプル
 監督…………… { アンソニー・アスキス
 レスリー・ハワード
 音楽……………アルテュール・オネガー
 作曲追加……………ウイリアム・アクスト
 撮影……………ハリー・ストラドリング
 装置……………ロウレンス・アービング
 編集……………デビッド・リー
 衣裳……………レ・ツェッテル

— 配 役 —

ヘンリー・ヒギンス……………レスリー・ハワード
 イライザ……………ウェンディ・ヒラー
 ドゥリトル(イライザの父)……………

ウイリフリッド・ロウソン
 ヒギンス夫人(ヘンリーの母)……………マリー・ローア
 ピカリング大佐……………スコット・サンダーランド
 ピアス夫人……………ジーン・キャデル
 フレディ……………デビッド・トリ

【解説】

バーナード・ショーは昔から映画嫌いとして知られ、映画の草創期にヨーロッパで有名な戯曲が相次いで映画化される風潮の中にあっても、「映画が芸術となる道はただ一つ、それは画面がすべて写幕になることである」などという彼一流の皮肉を投げて、自作の映画化を固く拒否し続けて来た。しかし、これは無声映画時代のことであって、トーキーとなってから、映画にも台詞というものが大きな役割を占めるようになっ

て、大いに考えを改めたものと見え、その後たまたま或る海水浴場で知り合った映画プロデューサー、ガブリエル・パスカルに自作の映画化権いっさいを委譲した。

この思わぬ幸運に、パスカルはショー作品の相次ぐ映画化に乗出したが、その先駆となったものがこの「ピグマリオン」(1938)で、「バーバラ少佐」(1941)、「シーザーとクレオパトラ」(1946)、「アンドロクレスと獅子」(1952)がこれに続いている。この中、普通の経路で我が国に輸入公開されたものは、「シーザーとクレオパトラ」と「アンドロクレスと獅子」の二作にすぎないが、「ピグマリオン」も「バーバラ少佐」も或る特別な関係でプリントが一本我が国にも来ており、先頃、非営利的な研究資料という条件のもとに、国立近代美術館フィルム・ライブラリーに寄贈されたのである。

この映画「ピグマリオン」が作られてからちょうど20年、その間、原作者のショーは1950年に、プロデューサーのパスカルも54年に相次いでこの世を去ったばかりか、主演者で且つまた共同監督の一人としても名を連ねているレスリー・ハワード(「化石の森」「痴人の愛」「風と共に去りぬ」などに活躍した)も、一足先に1943年に亡くなっている。共同監督の他の一人、アンソニー・アスキスは、今なお健在、最近では「若い恋人たち」で知られ、また主演者のウェンディ・ヒラーも今なお劇壇に重きをなし、「文化果つるところ」では端役ながら、円熟した演技の一端を見せていたが、この20年前の「ピグマリオン」では、文字通り花の盛りの彼女を見るのが出来る。

音楽を有名なアルテュール・オネガーが担当、今を時めく「戦場にかかる橋」のデビッド・リーが編集担当者として名を連ねているのも今日となってはさぶる興味がある。

【梗概】

イギリス各地の訛を研究し、その人のしゃべる言葉を聞けば、その人の生まれや育ちをピタリと当てるこ

とが出来るのを自慢にしているヒギンスは、街でめぐりあったうす汚い花売娘イライザを貴婦人に仕立てることを思い立ち、研究室に引取って、きびしい訓練を始める。やがて、頃合いを見て、試験台のつもりで引張り出したヒギンスの母の家の集まりでは、彼女は忽ち馬脚を表して、さんざんのていたらくであったが、更にまた猛訓練に猛訓練を重ねて出席したトランシルバニア大統領のパーティの席上では、一分のそつもない天晴れの貴婦人ぶりを見せ、満場の賞讃を博した。

こうして実験に見事成功したヒギンスは得意満面、これで万事すんだとばかり、ひとり悦に入っているが、イライザにしてみれば、なまじ貴婦人と見られたばかりに、この先どうしていいか解らず、ヒギンスの無責任をなじって、彼のもとを飛び出し、彼の母に助けを求める。

彼女に去られて、あわてて駆けつけたヒギンスの前に、イライザがきっぱりと言っているのけるには、貴婦人と花売娘の相違は、自分自身の立居振舞からではなくて、他人からの取扱われ方から生まれるものである。ヒギンスの友人のピカリング大佐が逢った早々から彼女をひとかどの淑女として遇してくれたことに、彼女は今なお忘れることの出来ない感謝の念を抱いているが、それにひきかえ、ヒギンスは、一步パーティの席から離れれば、自分をあくまでも実験台の花売娘としてしか考えてくれないではないか。その裏に実は彼への切々の愛情を秘めた、このイライザの辛辣な言葉を浴びて、ヒギンスは一方ではますます彼女と離れ難いものを感じながら、一方では学者として実験に成功した誇りと意地がはげしく渦巻いて彼女のひたむきな気持を前に頑なな平行線をたどって行く……。

ショーの「ピグマリオン」

——劇と映画とミュージカル——

中 川 龍 一

名人左甚五郎がつくった美しい京人形に魂がはいって色模様になる所作事があるが、それと同じギリスア

の伝説に、名彫刻家ピグマリオンが自作の象牙像ガテティアに恋をし、女神アフロディテに祈って生命をふき込んでもらう話がある。この伝説をそのまま劇化した例（ドイツのシュミット・ボンヤイギリスのウィリアム・ギルバート等）もあるが、バーナード・ショーの戯曲「ピグマリオン」では、20世紀イギリスの発音学者ヘンリィ・ヒギンスが自分の丹精して教え込んだ花売娘イライザに心ひかれるのである。但し原作ではイライザが独立を宣言してヒギンスの許を去るところで終って居り、出版された台本には「後記」として、彼女はフレddie青年と結婚して花屋の女主人におさまるのだと作者は書いているが、これは初演の時ヒギンスを演じた劇壇の大立物サァ・ピアボム・トゥリィが、幕切れに窓からイライザに花束を投げるといふ通俗的な演出をやったので、非常に憤慨したからだと伝えられている。しかしながら彼は、この兩人にピグマリオン伝説をあてはめて考えていたことは明かで、映画化の場合、イライザが再びヒギンスのところへ帰って来る結末に改めたのも、ショー自身の発案であり、事実、それ以後の版には、この件が加えられている。

次に、この劇は「音声学」という珍らしい題材を扱っているが、言葉に対するショーの関心は青年時代からつづいていて、晩年は英語改良問題に非常に力癩をいれ、遺言書にもアルファベット簡略運動へ贈与を指定していた。戯曲の序文でも彼は、イギリス人が自国語を尊重しないことを慨嘆しているが、有名な音声学学者ヘンリィ・スウィートと知り合いになったのはショーの23才の時で、この劇の主人公ヒギンスにスウィートの面影があることは彼自身も認めている。

「ピグマリオン」は本国よりさきにドイツ語訳によって1913年10月16日ウィーン、同11月1日ベルリンで脚光を浴びた。イギリスの初演は1914年4月11日ロンドンの陛下座ヒス・マゼテス・セアタで、イライザに扮したのは名女優パトリック・キャンベル、(ショーは彼女のためにこの役を書いたらしい)これが大人気を呼び、それまで実験小劇場で認められていたショーの

商業劇場に於ける最初のヒットとなった。もちろん作品の面白さや大スタア(トゥリィとキャンベル)共演が魅力だったにちがいないが、劇中、第三幕でヒギンス夫人のお茶の会から帰り際にイライザが言う「Not bloody likely!」という台詞が非常な問題になったらしい。つまり今日ではざらに使われるこの「bloody」という語が、当時は舞台上、口にすべからざる下品な言葉となっていたので、開場前から、内大臣が上演を禁止するとか、観客席に大混乱が起るだろうとか、いろいろ取沙汰され、それが、かえってロンドン劇界にセンセーションを起したのである。とにかく「ピグマリオン」はショーの作品の中で最も上演回数が多い劇の一つで、ロンドンだけでも78回は再演されているし、アメリカはじめ欧州各国どこでも大歓迎をうけている。

もともと映画化に反対していたショーを説きふせて全作品映画化権独占を許されたゲイブリエル・パスカルが、第一に手をつけたのが「ピグマリオン」で、1938年10月6日ロンドンで封切られて大当たりをとり、同年度アメリカのアカデミー賞詮衡で、文豪バーナード・ショーに脚本賞が与えられるという仕儀になった。さらに「ピグマリオン」の原戯曲と映画台本を基にしてアラン・ジュイ・ラーナアが作ったミュージカル「マイ・フェア・レイディ」(フレデリック・ロウ作曲)は1956年3月15日ニウ・ヨークのマーク・ヘリンジャ座初演、各方面の絶讃の下に今なおロング・ランをつづけていることはすでに報ぜられている。

(5月4,7,11,14,18,21,25,28日,6月1日の9回。毎回2時から近代美術館で上映)

国立近代美術館フィルム・ライブラリー